



京都大学国際融合  
創造センター教授

澤田芳郎さん

産学連携コーディネーターの筆者も、教員として授業を担当しています。その一つが主に、2年生が受講する全学共通科目の「映像制作論」。

さわだ・よしろう 1954年大阪府生まれ。京都大学農学部卒、教育学研究科修士課程修了。未来工学研究所研究員、京都大学助手、愛知教育大学助教授、教授を経て、01年京都大学国際融合創造センター教授。

# 次代をつくる

2本だけです。あとは研究成果を広報ビデオにする際にプロデューサーを務めたり、テレビの科学番組でリサーチに従事した程度。なので作品の身に踏み込んだ指導は原則行いません。しかしそれも功を奏してか、学生たちは熱心に取り組みま

## 映像制作論

とであり、作る側の倫理が問われます。

受講者には個人リポートでこのあたりを考察してもらいますが、しかし

若い世代は総じてこの問題を軽々とクリアしていきます。おそらくは間もなく、インターネットも

前提に、個人レベルの「映像コミュニケーション」が定着した社会になるのだと思います。

映像は意外に難しい表現手法です。意図したところが伝わらなかったり、意図しないことが伝わ

ります。言葉で表現できないことも表現できませんが、逆に言えば映像は「ごまかしの方法」というこ

とで、作る側の倫理が問われます。

受講者には個人リポートでこのあたりを考察してもらいますが、しかし

若い世代は総じてこの問題を軽々とクリアしていきます。おそらくは間もなく、インターネットも

前提に、個人レベルの「映像コミュニケーション」が定着した社会になるのだと思います。

映像は意外に難しい表現手法です。意図したところが伝わらなかったり、意図しないことが伝わ

ります。言葉で表現できないことも表現できませんが、逆に言えば映像は「ごまかしの方法」というこ

授業では企画、構成（シナリオ作成）、撮影、編集、上映という作品制作の手順を示したうえ、受講者を数人ずつに編成し、ビデオカメラや映像編集用パソコンを貸与して、各班20〜30分の作品を作ってもらいます。

筆者自身の制作経験は映像教材の構成・編集が

毎日新聞(大阪本社)夕刊  
2007年5月15日